

# 作家の肖像

第 11 回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



## 1912-2011 佐藤忠良

さとう・ちゅうりょう  
1912年宮城県生まれ。少年時代を北海道で過ごす。東京美術学校(現 東京藝術大学)を卒業後、39年に新制作派協会(現 新制作協会)彫刻部を創立し同協会の舞台に活躍。44年に兵役に召集、終戦後のシベリアで約3年、抑留生活を送る。帰還後に制作を再開し、81年にパリの国立ロダン美術館で日本人初の個展を開催。90年に宮城県美術館に佐藤忠良記念館が開館。98歳で死去。

### 心地よいアトリエ

9年前の正月明けに、彫刻家・佐藤忠良さんのアトリエを訪れました。私が勤める美術館で、佐藤さんの個展<sup>(※)</sup>を開催したいと思い、その依頼が主な目的でした。

当時、佐藤さんは96歳。もともと記憶力のよい方ですが、さすがにお年なので、話が飛んだり、記憶違いがあったりして、そのづどお弟子さんにやさしく指摘され、「そうか、そうか」とにこやかに答えていらっしゃいました。皆で楽しい時間を過ごしたことをよく覚えています。

私は仕事柄、さまざまな作家の方の仕事場へ伺いますが、佐藤さんのアトリエがいちばん好きです。道具が無造作に置かれ、整理整頓されているわけではないのですが、その具合がじつにいい。包まれるような居心地のよさがあります。それは、お人柄をそのまま表しているような気がします。

佐藤さんは北海道夕張市で幼少時代を過ごしたのですが、私も北海道出身。ときどき「サカイ君、北海道訛りで話そうか」と、他の人がいるところで、私にしかピンとこない“マギリ”(包丁)などと言う。ユーモアにあふれた方でした。親子ほど年の離れた私に対しても、昔からの友人のように気さくに接してくれたことは、忘れられません。

### 真実を語る彫刻

佐藤さんの作品を語るうえでは、何といっても終戦後にシベリアで3年間、捕虜として抑留されていたことを忘れてはなりません。想像を絶する過酷な体験が、その後の作品づ

くり大きな影響を与えたからですね。「極限の中での人と人との真情を何度美しいと思ったか知れない」と自著『つぶれた帽子』でも述べていますが、長い捕虜生活から解放された後になって、彫刻で人間の真の美しさを捉えようとしています。

その作品は、ときに「きたなづくり」と評されることもありましたが、当時、彫刻といえば、目鼻立ちのはっきりした美しい顔がつけられることが多かったなかで、佐藤さんは、日本人らしい顔立ちの市井の人々をモデルにしたからです。ただ造形的に美しい彫刻とはまったく違う、「真実を語る彫刻」なのだ、私は思っています。

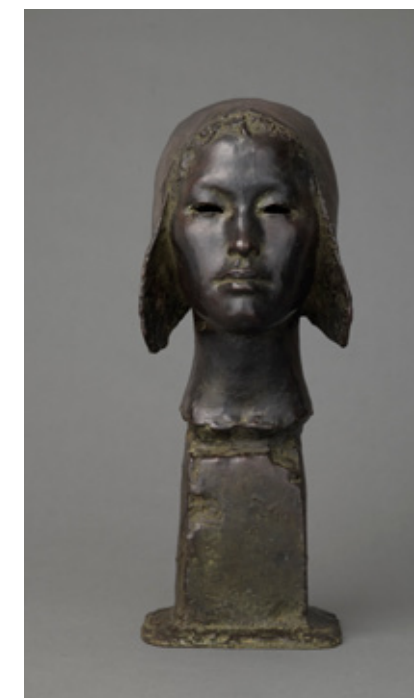
### 「触覚性」を大事にする人

佐藤さんは、「触覚性」を大事にした彫刻家です。生まれたばかりの赤ん坊が触覚で世界を捉えようとするように、触覚は人間のあらゆる感覚の土台になるもの。佐藤さんはよく、「最近の若い人は、触覚性が希薄になっている。身体で触って、自分の物差しをつくっていかないといけない」と話していました。今は、あらゆることを触覚より視覚で判断しようとする時代です。そのような時代だからこそ、佐藤さんの作品には、私たちの心を掴んで離さないものがあるのかもしれない。(談)

※「ある造形家の足跡 佐藤忠良展」(2010年12月～2011年3月)。世田谷美術館で開催された、佐藤氏の生前最後となった展覧会。

### 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校「美術」代表著者。



#### 左上／ふざけっこ

ブロンズ 高さ99cm 1964年  
彫刻家・朝倉文夫の孫の垂古がモデル。  
自身に孫ができるまで、子どもをモチーフにした作品のほとんどは、彼女がモデルとなった。(撮影:上野則宏)

#### 右上／ラップ帽

ブロンズ 高さ48.5cm 1982年

#### 右下／帽子のチョコ

ブロンズ 高さ35cm 1985年  
身に着けるものによって人間の輪郭が変化することに彫刻表現の可能性を感じ、帽子を被った人物像を多く残した。(撮影:上野則宏)

#### 左下／自画像

鉛筆 30.9cm×23.1cm 1972年  
もともと画家を目指していた佐藤氏。折にふれ、自画像を残している。これは60歳のときに描いたものである。

(すべて宮城県美術館蔵)